

槐

かい

岡井省二創刊

平成25年3月号

平成二十五年三月一日発行 第二十三卷第三号 通巻第二六二号 (毎月一回一日発行)
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



雪女

高橋将夫

雪女新幹線を止めにくりに
真つ直ぐな道まつ直ぐに冬木立
楳の火のはじけて闇の破れたる
枯蓮の骨が貫く厚氷

本筋の見えてきたりし大枯野
まだ無垢の心で羽織るちゃんちゃんこ
祖父祖母の額が見下ろす冬座敷
冬の日を羽織つて母の背中かな
風邪の子に死ぬつて何と問はれたる
魂の抜けてたちまち魚凍る
泰然自若極月の山河かな

槐安集

水野恒彦

煙突が詩人のごとし冬夕焼
入りつ日に侏儒の飛び出す石路の花
まほろばの人のぬくみと冬桜
あをぞらや零れてゐたる冬の蝶
風花や詩のうまれてはまた消ゆる

延広禎一

前田寛孝子句集「青鷹」上巻三句
高千穂の逆鉾目指す青鷹
戒壇を廻りて出づや青鷹
家康の城を掠めし青鷹
大鯉の堆朱ぼかしや春隣
唐辛子魔女の空飛ぶ心地して



加藤みき

おうおうと神の御渡り雪の春
歳旦の太鼓の一打吾をも打つ
海に入るみそぎの足のあたたかし
八方に枯れ伏す蓮地中守る
冬紅葉麦汁醸しぬたりけり

石脇みはる

大年や背くらべをする母と子と
寒紅梅盲導犬の特訓中
青鷹且つ大胆に高舞へり
鴨鍋や湖に聞せまりくる
集まればすぐ泡盛の十二月

中島陽華

一の酉おかめ蕎麦屋に先づ寄つて
陸前に笑顔生れたり棉吹ける
寒霧の巳の字朱墨の大書なり
茸狩前を横切るは専たうめ女かな
冬うらら枕カバーをもも色に

大島翠木

石蹴つて城下の冬を起しけり
神の庭水低く撒く師走かな
地下鉄へ黄泉の冬へと降りて行く
まなじりで数ふ綿虫飛鳥寺
除夜一打こころの中へ灯を入れて

竹内悦子

桃色の山茶花恋の予感かな
散り敷いて無尽蔵なる银杏黄葉
嬰も来て婆も来てをり大根焚き
注連飾り大上段を買ひにけり
大年の玄関に干す鱻の鱈

雨村敏子

年の市封印切りも僧形も
馬刀葉椎笑うてゐたる顔三つ
ブリリアンカット極月の高野槇
夕花野神のふもとの金色に
星空へ柚子の実たわわ撓わかな

本多俊子

冬木の芽惑星の自転たしかなり
みみづくの淋しきときも目をひらく
冬蝶としばらく同じ風にゐる
しなやかに打ち返す波年守る
やすらぎの紅を重ねし寒椿

近藤喜子

大鷹の止まるやいなや孤高の樹
雪晴や水のたましひ戻りたる
霜除や内に裸体のイヴをりぬ
よそゆきの声だしてゐる狐かな
補陀落の真下を旅す鯨かな

谷村幸子

冬木立おさなご歩む影長し
見上げしはすつからかんの烏瓜
静けさといふものありて竹の道
日照雨して河内に広き蕪畑
団栗を踏みどんぐりを拾ひをり

瀬川公馨

下に下に道払ひせるおん祭
論客の馬の骨野郎年の暮
田作や目玉あつたりなかつたり
みたぞみたぞポインセチアの下心
凧の外宮吹き抜け乾びたる

久保東海司

頼朝の菊の着付けの威丈高
しぐれゐる音に馴染みて酒を酌む
駈け比べ白息比べゐる親子
寄せ鍋や小走り買ひの葱一把
年惜しみつつ反古の火を昂ぶらせ

西村純太

霽れつつ影が翳追ふ迷宮都市ラベリッンス
冬襖しづかに変る龍の髭
寒椿命終ならば如何にせむ
人形の髪梳きにける冬の月
シャーレに脈うつ細胞去年今年

中野京子

大空を映す眼の鷹と匠
極月の千手千眼観世音
冬紅葉のわたるごとくに大夕日
灯も闇も美し白障子
人を世をいだきし山の眠りけり

柳川晋

大楯を据ゑてはじまる艶自慢
貝よりも海鼠になると決めてをり
底冷えの底を抜きたる破顔かな
年の際みな後出しのグーチョキパ
雑念の混じらぬ鄙の雑煮かな

岩下芳子

いづこへと声掛けらるる事始
もろもろを捨てて冬木の喉仏
円周率の無限に続く去年今年
茶の花の思ひ思ひの開きやう
天辺の朱欒色づく日和かな



槐市集

江島照美

隣席の話聞き入りおでん酒
極月に愛を称ふるフラダンス
大綿や魂どこに輪廻する
柿落葉果つる命に重なりて
傘握り会ひに行きたし夕時雨

熊川暁子

崑崙へ吾を差し招く青鷹
茶の花にほつこり母が来てゐます
おのおのが帰る背中や年の坂
冬至粥まぶたの裏のやはらかき
ふとわれに母を見つけぬ初鏡

桑原逸子

茶の花の生垣に添ふ日ざしかな
冬晴や空の果たての銀色に
眠る山往馬^{いこま}大社は火を祭る
手袋を買ふきつねの子遠き日よ
慈眼寺の鐘ひきりなし冬霞

後藤マツエ

日向ぼこ欲得いまだ衰へず
年追ふごと冬眠したくなりにつけり
冬ざれや心の和む四季桜
墓守りや大樹に小さき寒鴉
綿虫や緋袴纏陽に曝す



槐集

高橋将夫選

その思ひ未来へ繋ぐ冬芽かな 岡崎 寺田すず江

詩を探し冬の銀河に凭れぬる

寒林に月光絶え間なく注ぐ

年惜しみひと日ひと日の影を追ふ

枯蔓やしたたかに生きし名残りなる

霜降の蔓の余力を引き寄する 枚方 熊川 暁子

ピラカンサ丹の滝なして日をこぼす

シベリアが笛吹きに来る冬支度

応天門燃ゆ狐火のしわざとも

失せ物の現れては隠る十二月

直会の御開きとなり冬の虹 摂津 中田 禎子

竜宮の門叩きををる鯨かな

朝の窓きのふを全て消して雪

日々^祝新たな眼を開き青鷹

槐の木の八方の枝笹子鳴く

紛れなき雪雲走る三島の忌 岡崎 犬塚 芳子

初氷水のかたちに皺よせて

日を呑みて山はどかんと眠るかな

蒼天を虜にしたる冬桜

日向ぼこ刻をゆだねてをりにけり

寒禽の森に命を研ぎ澄ます 喜屋川 前田美恵子

折りためる心にどこか隙間風

寒靄に五百羅漢の話し声

鷹狩や引き際のその鮮やかに

初句会真珠と決めるイヤリング

義士祭の山科の雲速く散る 京都 竹中 一花

風連れて丹波詫りの杜氏来る

曇天を破る翼や青鷹

樹々達の第九始まる冬の森

大鍋に大根焚きををる旗日かな

銀河往來 高橋將夫

◇「槐集」 観照

寒林に月光絶え間なく注ぐ 寺田すず江
寒林に絶え間なく降り注ぐ月光は、まるで仏の慈愛のように私には感じられる。〈その思ひ未来へ繋ぐ冬芽かな〉、〈年惜しみひと日ひと日の影を追ふ〉〈枯蔓やしたたかに生きし名残りなる〉…どの句からも作者の満ち足りた精神の位相が伝わってくる。〈詩を探し冬の銀河に凭れぬる〉の「冬の銀河に凭れぬる」はなんととも壮大。作者は米寿。ますますのご健吟を祈りたい。

シベリアが笛吹きに来る冬支度 熊川 暁子
冬の烈風が竹垣などに吹きつける音を虎落笛というが、それを「シベリアが笛吹きに来る」とは、まさに作者ならではの表現。〈霜降の蔓の余力を引き寄する〉の「蔓の余力を引き寄する」や〈ピラカンサ丹の滝なして日をごぼす〉の「丹の滝なして日をごぼす」もまた然り。〈失せ物の現れては隠る十一月〉、たしかに十二月はそんなせわしない月である。〈応天門燃ゆ狐火のしわざとも〉の応天門は政治的陰謀事件で炎上したが、実は狐火の仕業だったと言ふあたりがいかにも俳諧。

朝の窓きのふを全て消して雪 中田 禎子
朝の窓から見える白一色の雪景色。昨日の全てが白紙になったと言われて、納得する。「きのふを全て消して雪」の表現は詩的で美しい。〈槐の木の八方の枝笹子鳴く〉と〈日々新たな

眼を開き青鷹〉は「槐」と「前田美恵子句集」への挨拶。〈龍宮の門叩きをる鯨かな〉は俳諧。

日を吞みて山はどかんと眠るかな 犬塚 芳子
「日を吞みて」しかも「どかんと山眠る」という。この雄大というか、おおらかさに絶句。続く〈蒼天を虜にしたる冬桜〉また然り。一転、〈初氷水のかたちに皺よせて〉は物の細部までよく見た一句。

寒靄に五百羅漢の話し声 前田美恵子
たしかに、五百羅漢が集まっている姿を見ると何か話しかけて来そうな気になる。それにしても、寒靄の中で五百羅漢は一体何の話をしているのだろうか。〈寒禽の森に命を研ぎ澄ます〉は厳しい精神の風景。〈鷹狩や引き際のその鮮やかに〉は作者得意の鷹の句。鮮やかに決まっている。

樹々達の第九始まる冬の森 竹中 一花
強い北風に吹かれて森の木々も騒がしい。それを「樹々達の第九」とみたところが作者ならではの視点。

野紺菊を片口に挿す忌日なり 近藤 紀子
片口に挿された野紺菊が鮮やかに目に浮かぶ一句。

冬銀河神の声するグレコの画 岩月優美子
グレコの絵には神の声が聞こえてくるような荘厳さがあるという。冬銀河で一句が引き締まった。
(以下略)